

經典餘師

近思錄

二

11
1029
40



近思錄餘師卷之二上

爲學類凡百十一條

前の卷已よ道体の大旨と明むるハまゝと學問を爲すに大方をこの卷に示すなり
依て第二小
次第をみる

濂溪先生曰聖希天賢希聖士希賢

濂溪先生の曰
聖ハ天と希ひ賢
ハ聖と希ひ士と
賢と希ふ

聖人天下と浩めりふ小就ていふとぞ天の四海を照るふがごとくなりと希望する賢人ハ聖人の如く
ありと稱ひ諸士ハ又賢人君子の場所を稱ひふやまふ伊尹顔淵大

伊尹顔淵ハ大賢
也伊尹ハ其君堯

賢也伊尹恥其君不爲堯舜一夫不

學ハ以て至聖人之
道也聖人學而至
可歟曰然之と學
の道如何

曰天地精と儲五行
之秀と得る者を
人として其本也真
靜なり其未
發せ未也五性具
焉曰仁義禮智信
形既生矣外物
其形に觸り其中
と動を失其中心
而七情出焉曰喜怒哀
樂愛惡欲情

聖人之道也聖人可學而至歟曰然
學之道如何

先生の曰くその學といふハ學で聖
人の地に至るに相成候や先生曰く然る又問ていふや
いその聖人に至るに有學いふやの道ハ如何いふにこの次
段先生より長くと聖
人に至るのいと説の

曰天地儲精得五行
之秀者爲人其本也真而靜其未發
也五性具焉曰仁義禮智信形既生
矣外物觸其形而動其中矣其中動
而七情出焉曰喜怒哀樂愛惡欲情
既熾而益蕩其性鑿矣

天地間の
正の精き五行

既熾而益
蕩れ其性
鑿矣

是故小覺者ハ其
情と約中於合使
其心を正其性を
養ふ愚者ハ則之
と制するを知む
其情を縱り而邪
僻於至其性を

是故覺者約其情使合於中正其心
養其性愚者則不知制之縱其情而
至於邪僻枯其性而亡之

あつてあるを中正よくして養
育するの愚人の制治を不知と情を縱りてさかす

稽^{くさ}而^て之^をと^ろ亡^やと

然るふ之と学道必
るべし先諸心と明
らるゝて養所と
知然して後力り行
て以て至るを求む
謂所明なる自と
誠なる也之と誠
その道へ道を篤
信する乎在道と信
るは篤則ち之行
と果を之を行ふと
果を則ち之と守と
固に我忠信心乎離
造次必是於顛沛

然學之道必先明諸心知
 所養然後力行以求至所謂自明而
 誠也誠之之道在乎信道篤信道篤
 則行之果行之果則守之固仁義忠
 信不離乎心造次必於是顛沛必於
 是出處語默必於是
 學問之道、右の修行等
 一ふて心を明らう

所養と肝要として力行て志向するは中庸
 所謂の心明らるるよりして誠の地位なるの工夫を
 要するの誠なるの道より今日道と信向するを
 心より実を篤くした仕果るべく大切に力守るに堅固
 な徳を修めざるに仁義忠信の工夫心をなすにざるや
 造次のもたれども又顛沛たる外出るをも内よ處し起

必^{かならず}に是^{こゝ}に於^おて出^でる處^{ところ}語^{ことば}黙^{もく}るも必^{かならず}に是^{こゝ}に於^おてと

久而失公弗則ハ之
 居安く動容周
 旋礼ハ中而邪僻
 之心自ウ生無矣

故^こに^に顔^{がん}子^し事^じと
とらうかなちゆういれい
 所^{しよ}ハ^ハ則^{すなは}ち^ち曰^いく^く非^ひ礼^{れい}
かろ
 視^して^て勿^なし^し非^ひ礼^{れい}聽^き
かろ
 之^{これ}勿^なし^し非^ひ礼^{れい}言^いふ^ふ勿^なし^し
いれい
 非^ひ礼^{れい}重^{おも}く^く勿^なし^し

仲尼之稱也

も居すも言い黙もくとも語ご言ごの
とも右みぎのく夫そあふづづともり

久而弗失則居之

安動容周旋中禮而邪僻之心無自

生スル矣

右のどく常々心をはるきし孫文布を失念とぬ
と死ハ後ハその場所を居て安易とるなり動容

周旋しゅうせんの中なかふもふもきやうなれなみ中ちゆうて
邪僻しやへき多おほく心こころとつゝ生うてち

故顏子所事則

曰非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非

禮勿動

故に顔子の常は守りて所事とする所を
 規と聽と言と動との四は就て礼の中

や否いなやいううとと者た考うてて礼れよ中ちゆう
 ざんこゝにに為な行ぎやうとハ勿なしととなり

仲尼稱之則曰

得一善則拳拳服膺而弗失之矣

夫子

右顔子と稱美有て仰る顔淵の学問は志向を
ハ格別なりハ一ヶ条として善訓を聞きたるハ宝玉を

諸もろと己おのれを求もとめ不ず而して諸もろと外ほかを求もとめむ博ひろく聞きこ強つよく記しる巧うまい文ふ麗うつく辭しを以もつて工こうと爲な其言そのことばと榮華えいけと道みち於お至いた者もの有あて鮮あざやか則すなは今いま之この学がく顔子がんし之この好このむ所ところも異ちが矣や

横渠先生明道
先生於問て曰く
性を定めて未だ
動う不て能未猶
外物於累々さる
何如

凡^{じん}人^{にん}みあはるべし生^{なま}まがくも天^{てん}地^ち人^{にん}の道^{どう}理^りは達^{たつ}しやうと
 中^{ちゆう}く及^{およ}ぶハあはるべしとて是^{こゝ}より一^{いつ}へて遂^{つい}ニハ學問^{がくもん}の道^{どう}す
 失^{しく}ぬ 不求^{もとめず}諸^{しよ}已^い而求^{もとめ}諸^{しよ}外^{がい}以博聞強^{はくぶんきやう}
 記巧文麗辭爲工榮華其言鮮有至^し
 於道者則今之學與顏子所好異矣

 學問ハ己^{おのれ}の身^みの徳^{とく}を研^{けん}ぐることにて私^{わづか}己^{おのれ}と去^さて人^{ひと}欲^{よく}むこと
 生^{なま}ぜど外^{ほか}の望^{ぞう}祇^{ただ}かひあるまじし左^{ひだり}ハありて世間^{せかん}
 は名^なをうる身^み利^り得^え志^し向^{むか}ハハフ心^{こころ}なり
 博^{はく}く人の説^{せつ}をまき記^き文章^{ぶんしょう}を麗^{れい}巧^{こう}言^{ごん}小
 華^けと榮^{さか}して篤^{あつ}行^{かう}信^{しん}実^{じつ}の道^{どう}ハハらるゝと
 寄^よざるなり顔^{げん}子^し好^{このむ}ところトハ異^{こと}なり ○横渠

 先生問於明道先生曰定性未能不
 動猶累於外物何如

 横渠先生程子の
 同答する性^{せい}を定^{さだ}むる

明道先生曰わのしやうせんしやういふ 謂いふ 所定者動しやうていしやう 亦また 定さだ 靜しやう 亦また 定さだ 將さう 迎いふ 無な 内外ないがい

苟くも外物と以て
 外と爲己と牽而
 之小従ハ是己と
 性を以て内外有
 と爲也

と心をつまづむるをとり外より物をも
いふも心累ハハにいろいろの工夫有りとあり

明道先生

曰所謂定者動亦定靜亦定無將迎

無内外

心を悟得するとり心の盤石のつくた
るをとりその故みよむる造次顛

沛の中をていうな動顛をも定まりて動くは靜う
する所ても別な不動の工夫といふなりともあ

む只いふ心自然とて将迎るといふと

苟以外

もの内外のとり隔もあるべしとぞ

物爲外牽已而從之是以己性爲有

内外也

心をとつて外より誘ひたる物も牽
らるゝとくば是已が性も内外有とあり

且以性爲隨物於外則當

ある返り迷惑

其在外時何者爲在内

性にて外物を
引きて隨順せ

是外誘之絶於
意有而性之内
外毎こと知不也

既内外を以て二
本と爲則又鳥を
處は定ること語
可也

夫天地の常する
其心万物小普而
心毎に以て聖人
之常其情万事
小順人而情毎を
以て故君子の學
廓然と而大公物

誘而不知性之無内外也
是心の不定が
ゆゑ外物に

既以内外爲二本則
非廣まるやうして是とて何とて誘ふまひ
みよとて道を絶ちてと意念よりむをばるる
外のとて迷ひる

又鳥可遽語定哉
内の外のと根本が二心有て
ハ速に取みたりと處の

夫天地之常以其心普萬
語みたるも
しなぞとく

物而無心聖人之常以其情順萬事

而無情故君子之學莫若廓然而大

公物來而順應
普く万物を惠そとて幾
年とり人限るにこと天

の末而順應す
若莫

易曰負
吉ふて悔亡
憧々として往來
思ふ小從ふと

地の常として無我無心自然の大徳なり
同く天の万物を生きたまふはひ
の情を以て萬事品く小應じ万民仁惠を施し
とくも是も自然の大徳とて別な情を用ゆること
物君子の學問は實は大公廓然けて私心を
物万事きつりつるその理く順ふ應ふ人

易曰貞吉悔亡憧憧往來朋從爾

思
易は右咸の卦の爻の語く憧憧くハ人の往つ來つ
くる負つくるの卦の心ハ人ハ免るも角も此を
固る心を負くつる心戒めを守ること第一爻と
ナ上の段しつる胸中常小廓然なること外物
みくる煩悶する負つてくる感應するハ
訟事として悔むむとくる亡きゆくりハ不
美私己のつる心鬼で憧憧往來にゆる同る
をへその不美する朋の事のみ出きつるて再思
は應へ感通して從附つる災禍の苦く
とくるべし思ふに慎しむる

苟くも外誘之
除於規規
將東於滅而西於
生を人に見んと將也
惟日之足不非
顧ふ其端窮
毎得而除可
小不也

人之情各蔽所
有故以道適
と能不大牽患
は自私而智て用る
於在

自ら私する則ち為

規規於外誘之除將見滅於東而生
於西也非惟日之不足顧其端無窮
不可得而除也

人之情各有所蔽故
不能適道大牽患在於自私而用智

自私則不能以有為為應迹

と有て以て迹應
と用る則ち明學と
以て自然と為と
能不

今外物と惡之心
と以て而物無之地
を照とて求む
是鑑と反而照と
んてと索也

易曰く其背小
艮て其身を獲
不其庭を行て
其人を見不

用智則不能以明覺為自然

今以惡外物之心而求照無物之地

是反鑑而索照也

艮其背不獲其身行其庭不見其人

易の艮の卦の詞より上の段の意をいふと、
動物の理小叶て、
易の艮の卦の詞より上の段の意をいふと、
動物の理小叶て、
易の艮の卦の詞より上の段の意をいふと、
動物の理小叶て、

孟子亦曰智之惡所の者ハ其鑿と云るガ為也

その身とすゝて得ざるガゆハその身と不獲とす

孟子亦曰所惡於

孟子の仰せ

智者為其鑿也

其外を非とし而内を是とせんハ内外之兩忘也

則定定則明明則尚何應物之為累哉

然則定する則ハ

然とて定する

聖人之喜びハ物之當小喜當之

聖人之喜以物之當喜聖人之怒以物之當怒

之用ゆる之喜怒と
以て聖人喜怒の
正を視如何と爲
哉

夫人の情幾易
而して制し難き
者ハ惟怒と其ハ
一と爲す能怒る
時於遽は其怒を
忘れて理之是非
觀ハ亦外誘之惡
小豆ら不と見る可
而道は於ても亦思
い半不過る矣

伊川先生朱長

怒を用ゆる仕方と聖人喜怒の正とを視集
てくるや如何の所も分明なるべし
夫人之

情易發而難制者惟怒爲甚第能於

怒時遽忘其怒而觀理之是非亦可

見外誘之不足惡而於道亦思過半

矣
人情は就て考ふる制らるるべし然るに怒の
心は但し工夫あり何ぞ腹怒くるのよき處と怒を

抑えて先る事の道理ハ是れ非ととるべし是ハ外誘
と怒惡小足らぬと分別べし是ハ思慮の悟も大

意得たるべし
○伊川先生答朱長文

書曰聖賢之言不得已也蓋有是言

則是理明無是言則天下之理有闕

文は答る書は曰
聖賢之言已とて

得不也蓋此言
有則ハ是理明ら

るあり是言金則ハ
天下之理闕ること

有焉彼未相陶治
之器也制せ不則

生人之道豆不
有がと一矢聖賢

之言已んと欲
雖得んや然ると

其天下之理と包涵
し尽して亦甚と

約まらず也後之人
始て卷と執則ハ文

害於道必矣
程先生との友朱長文より學問

焉如彼未相陶冶之器一不制則生

人之道有不足矣聖賢之言雖欲已

得半然其包涵盡天下之理亦甚約

也後之人始執卷則以文章爲先平

生所爲動多於聖人然有之無所補

無之靡所闕乃無用之贅言也不止

贅而已既不得其要則離真失正反

害於道必矣
の工夫ハ文章はあつたが程子の

仲ハ五經論孟はある聖賢の言ハ皆己とて得る

章を以て先と爲す
 平生爲所動され
 聖人於多一然
 して之有るも補
 所益く之益とも
 闕る所靡乃ハち
 益用之贅言也止
 贅する而已ち不
 既其要を得不
 則ハ真と離と正と
 失て反て道と害
 必せり矣
 來書小謂牙後人
 其善と忘れ
 不見るて見せ便
 と欲此乃ち世人

して世は傳るるに今人の著述して己名と殘
 とはあらず論孟の書あるに天下の理人間の道明
 白なる一言なくも金匱經陶治の器のど
 一ツ不制とて
 生産の道具一ツ不足くその如く聖賢の金言ハ
 己人とすりてハ不叶くさるる天下の道理を包涵
 して不殘約述より有るに今の人ハ書卷女
 臨見や否や詩の文章のと先へさぎたつて聖
 人の書物より多し是を見ふ有つて毎て補
 する闕もなき毎用の贅言元來肝要なりぬ文章
 反りて真正をうしむ
 來書所謂欲使後人
 見其不忘乎善此乃世人之私心也
 夫子疾沒世而名不稱焉者疾沒身
 無善可稱云爾非謂疾無名也
 の末

之私心也夫子世
と没而名の称せ
られ不と疾む焉
者ハ身と没す
善の称む可矣を
疾て尔云名矣を
疾と謂ハ非也
名ハ以て中人を
厲す可君子れ
存する所没々々
所ハ非ぞ
肉忠信を積徳
小進む所以なり
言と擇ひ志ざ
篤業は居る所以也
至ると知て之に至

書は文章と著述ハ後の人の善道と心は不忘が為とわ
 れども是をより私己の心にて己が名とむさぶるもの
 論語は名を世に称せられざると思ふ有ハ吾身は称ら
 る善行を恥惡むとく音名を世に揚るては悲
 名者可以属中人君子所存非所汲
 汲善人ふ心づけて世上に知られんと羨望ハ必竟中
 位の人ふ屬を付るが為は是亦有べきこと君子
 以上の人の心は存する所ハ中名
 て求むるもの汲汲するといふこと
 信所以進德也擇言篤志所以居業
 也胸の内小忠臣の実徳を積むるハ心の徳進
 きたる口より出る言バよりなれば能擇又志上篤
 業は置所以なりとぞ知至至之致知也求
 知所至而後至之知之在先故可與

ハ致知也知て至る
所を求知て而て
後小之又至る之と
知て先小在故小
幾と云ふ可謂
所條理と始る者
智之事也

終りと知て之と終ハ
力行也既て終る
所と知則ハ力ハ進
而之と終之と守る
後は在故よと小
義と存と可謂所
條理と終る者聖
之事也此學之
始終也

幾所謂始條理者智之事也

徳進む
糸目と

智者と聖者との二段に説く至善の地に至る
べしと目付所を知てそのうち至るを知るは先小
有事の幾とて端先を見付るなどの人とは異なる
べし音楽とてといふハの鳴りのなの一條理の
案の始ハ鐘とて

知終終之力行也既知所

終則力進而終之守之在後故可與

存ス義ヲ所謂終條理者聖之事也此學

之始終也

至善の全備とて道理を全く終る
 力き行の工夫くふうなり至善とて遂終すいしゅうて守持しゅぢ

重^{おも}に天下^{てんか}の事^{こと}小^{せう}終^{しゆう}て何^{なん}一^{いつ}義^ぎも脱^{だつ}はざるをう^うその
 の條^{じょう}理^りをてゝく^く終^{しゆう}と^といふのて音^{おん}
 樂^{がく}とて磬^{けい}を打^うて曲^{きよく}を終^{しゆう}くとの段^{だん}ハ聖^{せい}人^{にん}の徳^{とく}に

君子敬と主として其内を直

一義を守りて
其外の方には敬
立而内直く義形
れ而外方より義
ハ外方形る外ハ
在る非ざる也

備具ふたとて孟子は夫子の
徳よたとて是學問始終未なり

○君子主敬

以直其內守義以方其外敬立而內直義形而外方義形於外非在外也

君子の道ハ心の内ニ敬と主人として大坊と守るゝ
しむと讓とれハ心の内ニ守る所を大坊とせらるゝ中
ふしとよみハ心の外にて行はるすいを大坊とせらるゝ内を
敬するを仁とせし正直よしとて邪意なく物をそとつゝ

敬義既立其
德盛矣大

るを期せ不
而大有り矢徳
孤々不也用
る所々而周あや
うゝ不ふとそら毎く施

形見あり 告子が言のどく 外は在とりのハあはれ

敬義既立其德盛矣不期大而大矣
德不孤也無所用而不周無所施而

不利孰爲疑乎

敬義立けいぎたつ派は心こころは充みるるとと然しかハ
その徳大とくおほきと期もちを

所利せ不^いと^る立^み
一孰^{とれうご}う^{きん}疑^やひ^やを^や乎

動く小天を以てする
の妄妄と爲動く
人欲を以てする
則ハ妄なり矣妄
妄の義大なり矣
哉邪心妄一と雖
苟も正理を金小則ハ
妄也乃邪心也既
小己ふ妄妄なり
往く有宜く不
往則ハ妄也故も
妄之象は曰其正
匪ぜんが青ち有

大なるものなりて人々歸服するが故に孤を以て
 依て施し用ゆる所ハ人の利するところなるの義
 女も疑ふべ
 ○動以天爲無妄動以人
 欲則妄矣無妄之義大矣哉雖無邪
 心苟不合正理則妄也乃邪心也既
 已無妄不宜有徃徃則妄也故無妄
 之彖曰其匪正有眚不利有攸徃
 も身みみ体てい何なん妄みだとありて爲な行ぎやうも私し己こ氣き女にょ
 も天てん然ぜん自然しぜんは任まかせりて易えきの無む妄みだの卦くわい
 す妄みだなる心の無む妄みだといふ義ぎなり欲よく心しんよかること妄みだ
 り人の心しんの義ぎ実じつに大おほなる心得こころえなりたとく邪や心しん
 も理り正せいかゝる妄みだといふものにて中ちゆう
 り邪や心しんといふものゝ无む妄みだといふ自然しぜんの地ちは止とどまり止とどまり

往則ハ亡女也故マ五
 女^{むすめ}之^の家^{いへ}ヨ曰^い其^{その}正^{ただ}
 匪^{あやま}ズ^りバ^{あやま}青^{あやま}チ有^{あり}

りゝのゑらの義実み大なり心得たりたとて邪心なり
 とも理筋正しかりぬこゝろなる妄とゞりありて中
 り邪心とゞりゑの無妄とゞりハ至然の地止する處

往ゆ彼こ有うふ利り不あ

止まるゝとて重往ハサナリ妄ウリとの卦の決

人之蘊蓄ハ学
 由テ大アリ多
 前古の聖賢
 之言ヲ行ヲ聞

○人之蘊蓄由學而大在多聞前古

小在跡と考て
 以て其用と觀言
 と察とて以て其
 心と求め識し而
 之を得て以て其
 徳と其成とを

以求其心識而得之以蓄成其德

 胸中々々温蓄止は依て大徳
 賢の金言と行状の跡は心を就てその用とて見又
 その教訓の心言とを察して心は識
 徳を蓄成

 ○咸之象曰

威い之の多おほ矣や曰い君きみ子こ以もつ虚きよ受う傳でん曰い中ちゆう私ひ主しゅ無な則すなは感かん通つう也なり

君子以虛受人傳曰中無私主則無
 感不通易の咸の卦の象として説く人々の心と氣
 我々として空虚なるもの人々の咸通と受

經典余帛

卷之三

一

受之非聖人有感必通之道也

私已量

量而容之受
擇而之受
聖人感有必
通之道非

其九四曰貞吉悔亡憧憧往來朋從

其九四曰貞吉
悔亡憧憧往來
朋從

爾思

故咸皆就人身取象四當心位而不

言咸其心感乃心也

咸其心之物
自感

傳曰咸其心者
人之重也故咸
皆人身之就
象取四心位
不當其心感
言不感

則害於感通所謂悔也聖人感天下

感之道無所不通有所私係

乃心感也
感之道通
有則感通
謂所悔也
聖人天下
之人心也

之心如寒暑雨暘無不通無不應者

亦貞而已矣

感通之理
不言不語
巧

有則感通
謂所悔也
聖人天下
之人心也
之如通
應也
負者亦貞而已矣
之謂也

貞者虛中無我之謂也

貞者心中

然用其私心以感物則思之所及者

有能感而動所不及者不能感也

以有係之私心既主

所の者ハ註感ハ而
動有及不所の
者ハ感ざる能
ハ不也

係る有之私心
と以て既一隅事
於主ハ豈能
廓然ハ通せ
不所無乎

君子之難阻ハ遇
必も自身於習
失而之致有乎
未善ハ不所
有則ハ之改む
心於歎ハざる
無則ハ勉を加へて

於一隅一事豈能廓然無所不通乎

○君子之遇艱阻必自省於

身有失而致之乎有所未善則改之

無歉於心則加勉乃自脩其德也

艱難困窮の阻苦ハ遇ハた吾身と三首ハ
かたてりや昔ハ義理をより失ふハ有て

其の咎ハ致さずハ夫ハ善ハ有るハ
思ハ其ハをあらめり又ハ心ハ歉るハ有るハ

○非明則動無所之

非動則明無所用

乃ち自ら其徳を
脩む也

明ハ非ハ動ハ之
所無ハ動ハ之
れ則明用ハ所無

習ハ重習也時復
思繹ハ中於決

善ハ以て人ハ及
而信從者衆

故ハ樂ハ可也

人ハ及ぶ於樂

不ハ而問ハ益
乃ち謂所君子

○習重

習也時復思繹決於中則說也以

善及人而信從者衆故可樂也雖樂

於及人不見是而無悶乃所謂君子

學問ハ習と第一ハ學の字ハ和訓するハ師

ハ常ハ時ハ心ハ思案尋繹をもちハ心の中ハ

決於合点ハ故ハ心喜悅ハ夫ハ得意

者衆ハ其ハ場ハ性惡ハ人ハ

ハ是ハ思ハ君子の大量ハ

古之學者ハ已欲得之於己也今之學者ハ人欲見知於人也

伊先生方道輔曰聖人之道坦如大路學者病不得其門耳得其門不可不蚤也其門不可不早也

古之學者爲己欲得之於己也今之學者爲人欲見知於人也

伊先生謂方道輔曰聖人之道坦如大路學者病不得其門耳得其門無遠之不可到也求入其門不由於經乎

今之治經者亦衆矣然而買積還珠之蔽人人皆是經所以載道也誦其言辭解其訓詁而不及道乃無用之糟粕耳

觀足下由經以求道勉之又勉異日見卓爾有立於前然後不知手之舞足之蹈不加勉而不能自止矣

今之治經者亦衆矣然而買積還珠之蔽人人皆是經所以載道也誦其言辭解其訓詁而不及道乃無用之糟粕耳

觀足下由經以求道勉之又勉異日見卓爾有立於前然後不知手之舞足之蹈不加勉而不能自止矣

知不足勉之
加不而自
止註不矣

明道先生曰
辭之脩飾其誠

會之不有可
辭之脩飾其誠
偽之為也

其言辭之脩
若其正己
家敬以內

勉之止之
明道先生曰脩

辭立其誠不可不子細理會言能修

省言辭便是要立誠若只是脩飾言

辭為心只是為偽也

辭之脩飾其誠
若其正己

章之要
若其正己

若其正己之誠意乃是體當自家敬

正為立己之誠意乃是體當自家敬

直義以
外方小

道之浩浩何處
手之下

有居可之處有則
以之業之修可也

終日乾乾
之大事却只是忠

信之德進所以
實之業

為之辭之修其誠
修之業

修之業

修之業

以直內義以方外之實事

手惟立誠纔有可居之處有可居之

處則可以修業也終日乾乾太小

事却只是忠信所以進德為實下手

處修辭立其誠為實修業處

誠之脩飾其誠

忠信之業之修

忠信之業之修

忠信之業之修

伊川先生の曰道志
志を切る固より
是誠意若迫切
理小中ら不則反つて
誠する不と為蓋実理
の中自ら緩急有是
の如く之迫ると容不
天地之化を觀る乃ち
知可

孟子才高之と學小
依據可至學者當
顔子と學當聖人入
と近しと為力を用
處有又曰學者字
得て錯ら不んとを

伊川先生曰志
修治の場所ありとせ

道懇切固是誠意若迫切不中理則

反為不誠蓋實理中自有緩急不容

如是之迫觀天地之化乃可知

實理の中自ら緩急有是の如く之迫ると容不

兎角は天地自然の物を化生の徳に付て知

○孟子才高學之無可依據學者

當學顔子入聖人爲近有用力處又

曰學者要學得不錯須是學顔子

孟子

○明道先生曰

且省外事但明乎善惟進誠心其文

章雖不中不遠矣所守不約泛濫無

功

○學者識得仁體實有

諸已只要義理栽培如求經義貫裁

培之意

仁は本心の徳已に此仁の體を會得

要と須く是顔子
を學須

明道先生曰且外事
を省但善乎明

て惟誠心を進む其
文章中ら不と雖遠

かどと矢守る所約
せ不泛濫と望

學者仁の體を識得
て実小諸已有せ

ハ只義理栽培を
を要せよ經義を求

が如く皆栽培之意

昔字於周茂叔受
每子顏子仲尼樂
處尋今樂所
何事

○昔受學於
周茂叔每令尋顏子仲尼樂處所樂
何事

見所期之所遠
且大之不可
可不然之
亦力之量漸
有須志大
勞力小
事之敗
講習更莫
而善之工夫
如莫

○所見所期不可
不遠且大然行之亦須量力有漸志
大心勞力小任重恐終敗事○朋友
講習更莫如相觀而善工夫多
付人志向之期
小之漸
若之漸

須是其心在大
開闢之使須
九層之臺
須大小脚
得須

○須是大其心使
開闢譬如為九層之臺須大做脚方
得

明道先生曰舜
之中小
教海於
若熟
也須這裏從過須

○明道先生曰自舜發於畎
畝之中至孫叔敖舉於海若熟也
須從這裏過

參也竟小魯以
之得

○參也竟以魯得之

明道先生記誦博
識以物

○明道先生以記

志を喪ふと為す

礼樂は只進反之間に在る便ち性情之正を得

父子君臣天下の定理とて天地之間に逃る所無

天分を安んじて得て私心を則つて不義を行ひ一の不孝と殺伐

誦博識為玩物喪志

誦を博く又ハ詩文を博くするをいふ實學のハ物に耽るを記

禮樂只在進反之間便得性情之

正礼は行儀堅固成がゆへ人進める依て進を以て有文

とを進めざるやいふやいふ樂はたのしみなりなり

父子君臣天下の定理無所逃於天地之間

天地の義の重なり又子の孝道の深き

安得天分不有私心則行

一不義殺一不孝有所不為

天地自然

有分毫私便不是王者事

論性不論氣不

備論氣不論性不明二之則不是

氣質の便ハ己の前の章の委曲なり性論の明

明理論治便須識體

學問ハ心とて肝要なり不明白

論學便要

名聞私欲を知らず尊崇を所するをいふ國家を

治るハ體格を不知して有るハ格外ハ格好の

終始先後未だ知らず天下の政を治るハ格外ハ格好の

終始先後未だ知らず天下の政を治るハ格外ハ格好の

曾點漆雕開已見大意故
意見故聖人之
小也

聖人與之

見識ハ道体の本をいふ漆雕開の

根本須是先天培

道術の大概をつま

根本須是先天培壅

聖と須然と後趨

然後可立趨向也趨向既正所造淺

向と可也趨向既

深則由勉與不勉也

根本を培壅して水を

正と造所造淺

以て水をそそぐ此の工夫は本心の徳を育養

深則勉與不勉

以て次第を正しこれより所の深く重きと又淺く浮

敬義夾持と直上

敬義夾持直上達

天德自此

天德自此

解意一生便是自

解意一生便是自

棄自暴

棄自暴

便老而衰

便老而衰

人之學不進只是不勇

人之學不進只是不勇

學者為氣所勝習所

學者為氣所勝習所

奪只可責志

奪只可責志

內重則可以勝外

內重則可以勝外

急度志向を責求

急度志向を責求

學者氣小勝

學者氣小勝

所習小奪所為

所習小奪所為

小只志を責

小只志を責

內重則以外

內重則以外

小勝可

得之深則可以見誘之小

董仲舒謂其

義正謀其利明其道不計其功

利謀其利明其道不計其功

孫思邈曰膽大

心欲而心小

智欲而智小

欲而行

之輕

道義の心内は重なり人を欲の私意は軽

得深則可以見誘之小

得るは深ければ誘ふは小なり

董仲舒謂

董仲舒の語を

正其義不謀其利明其道不計其功

この段は董仲舒先生の語を

有の

有るものなり

大膽

大膽なること

孫思邈曰

孫思邈の言

膽欲大

胆を欲するは大き

心欲小

心を欲するは小

智欲圓

智を欲するは圓

而行欲方

行を欲するは方

可以為法矣

上の二段を程子先生評を

大抵學不言而自得者乃自得也

大抵學不言而自得者乃自得也

有安排布置者皆非自得也

有安排布置者皆非自得也

視聽思慮動作皆天也人但於其

視聽思慮動作皆天也人但於其

中要識得真與妄爾

中要識得真與妄爾

明道先生曰

明道先生の言

明道先生曰

明道先生の言

明道先生曰

明道先生の言

明道先生曰

明道先生の言

明道先生曰

明道先生の言

已の著るを要する
而已故に切に問て近
く思ふ則仁在其中
小在矣

言忠信行篤敬雖
貊之邦と雖行
矢言忠信不行篤
敬不則里と雖も
行かん乎哉

學只要鞭辟近裏著已而已故切問
而近思則仁在其中矣

言忠信行篤敬雖貊之邦行矢言
不忠信行不篤敬雖州里行乎哉

立則其參の前於
見也與在則其
衡於倚を見る也
夫然と後行れん
只此是學

質美者明と得
盡して查滓便ち
渾化を却て天地
體を同く次
其次惟莊敬持
養を其至る小及
んでハ則ち一也

於前也在與則見其倚於衡也夫然
後行只此是學
與天地同體
其次惟莊敬持養及其至
則一也

弘^{ひろ}而^{して}毅^き不^ふ則^{そく}
立^た難^{がた}毅^き而^{して}弘^{ひろ}
不^ふ則^{そく}以^{もつ}て之^の居^ゐる
と^う岳^{がく}

伊川先生の曰く、
學者ハ優柔厭飮
と先後次序有り
今之學者ハ却て只
一場の話說を倣て
高を務る而已

つゝとぐんぐんこあひ
常小杜元凱の語を愛
こころのうらや
江海之浸膏沢
うらやむべし
の潤をが若く渙然と

て後得のちえと為也なるなり

いまのぐうやわくゆい
今之学者徃々游
夏を以て小して学
ぶ足不として然ども
游夏の一言一事却て
是實

のちのぐうやたきこひ
 後之學者高きを好
 こし人心を千里之外
 於游如^{いとこそ}然^{せへり}ども
 自身ハ却只此在

而不毅則難立毅而不弘則無以居

積つみるるぬぬ扱あままとと仁にといい人ひと重おもささのの故ゆゑ一生いっしやう涯ぎ身み付つて
 持もちち同どう雌しくく○伊川先生曰古之學者優柔
 厭飫有先後次序今之學者却只做
 一場話説務高而已
 伊川の語より古の學問
 の我がハ優柔とりて

然と腹中十分してゆるやうにて内ちよくとくとり
らぬゆへ先後の次第有て今いまの学者ハ一場いちやう
の高慢語かうまんごをまゐりまゐりて此こハ深切しんせつなるべし

渙然冰釋怡然理順然後爲得也

常小左傳の序を認め杜元凱先生の語と愛する
と有り學問ハ江海又ハ膏沢などの浸潤のごく沢山なる
所よりふつと有りとうはりみきふ有く解しがく疑惑
と有りみきく氷の釈渙がごとく故み心も怡然して道
理もそれな順ふて自得せんとく

今之學者徃徃以游夏爲

小^ニ才^ト足^ニ學^ニ然^ニ游^ニ夏^ニ一^ニ言^ニ一^ニ事^ニ却^ニ認^ニ是^ニ

實まづ當時このときの學者がハ高う學が此この二ふた先生せんせいハ文章ぶんしょうの達人とくじんなるふ決けつ
て實じつ行こうのひと々々ありし後のち之の學がく者が好この高う如ごと人ひと

游心於千里之外然自身却只在此

千の學者ハ高きところをきくありたを
里先をもさうふて自身ハ三四里とありき

修養之年を引所
以國祚之天の永命
を祈る所以常人
聖賢於至皆工夫
裏に到る則此應有

○修養之所以引年國祚之
所以祈天永命常人之至於聖賢皆
工夫到這裏則有此應

忠恕公平なる所以
德を造る則忠恕自
其致りハ則公平

仁之道之を要する
小只消一の字を道
公ハ只是仁之理公
將て便ハち喚で仁

○忠恕所以公平造德則自忠恕其
到則公平
要之只消道一公字公只是仁之理

做可ハ不公ハ而人
を以て之ハ體を故
小仁ハ為

只公ハ則ハ物我兼
照故ハ仁能恕なる
所以能愛する所以
なり

恕則ハ仁之施ハ愛
則ハ仁之用也

今之學を為者ハ山
麓に登るが如ハ其迤
邐なる方て闊歩せ
不ハ莫峻處

○今之爲學者如登山麓方其迤邐
莫不闊歩及到峻處便止須是要剛

止須しよくく是剛決果こつ
敢かんてて以て進しんんんこと
要ようすすべべい

人ひと力行りきやう要ようすす謂い
ハ亦また只是淺近せんじんの語ご

人ひと既すでに能よく一切いっさいの事こと皆みな
當あたふふ所ところと知ち見けんを
當あたふふ所ところと知ち見けんを
當あたふふ所ところと知ち見けんを

之これの知ちを必かならずらば必かならずらば之これ
と好このむ之これを好このめむ

決果敢以進けつこくかんいしん

今いまの學者がくしやハ浮うききのみふく
心こころ安やすくくハ習しゆんんとたとくくをを蕭しやうよ

故ゆゑ人謂ひといふ要よう力行りきやう亦只是淺近語せんじんごの

人既ひと能よく知ち見けん一切いっさいの事こと皆みな所當しよたう爲な不ふ

必待著意終著意便是有箇私心這

一點意氣能得幾時了

知ち之の必かならず好この之の好この

之必求之求之必得之

古こ人ひと此箇この學がく是終身事果能顛沛造次

必於是豈有不得道理

沛はい中ちゆう造次そうさいるる間まも心こころを是こゝににととめ

各おの々おの道みち學がく義理ぎりを不自得みづかるる有あるるべきやととり

近思錄餘師卷之二上終

爲學子類

古之學者ハ一今之
學者ハ三つ異端
ハ与々不焉

○古之學者一今之學者三異端不
與焉古人の學問の仕方一とちて今の人へ三と

與焉

古人の學問の仕方一もぢく今の人へ三を
ぢやうぐゆへは達しづゝゝゝ但し告子又

い老子の法のこゝに端向の異ふ
たう流派の此内よりうずく
一曰文章之學

二曰訓詁之學三曰儒者之學欲超

道舍儒者之學不可

今の學者の三つうち
とん一は詩文章作り

と二つは文義の訓詁の博識自慢と三つは儒者の道義との三つなり但し道義は儒者の字句を是と

子曰人六經を
見て便にち以謂聖
人亦文と作るに知
る不聖人亦胸中の
蘊む所と標發し
て自ら文と成ると
耳謂所德有者必
言有也曰游夏文字
徐何や曰游夏亦
何や嘗て筆と兼て
詞章と為ると云ふ
也且天文手觀て以て
時變を察し人文
手觀て以て天下と化
成と云ふ此豈詞章
之文やん也

文不知聖人亦標發胸中所蘊自成
文耳所謂有德者必有言也曰游夏
稱文學何也曰游夏亦何嘗兼筆學
爲詞章也且如觀乎天文以察時變
觀乎人文以化成天下此豈詞章之
文也
又問古者の人を作文と云ふや程子云へ
りて曰常人の六經を聖人の作文と云ふ
然る思ふに龍虎の聖人有德の人の胸中の自
然の蘊むるをかり人向て文を學ぶに子游子夏と有る
いはん程子の曰ふに今人の文の多く筆墨詩作
の更にいへば天文地理人道の文と詩文の更にい
へば
○涵養須用敬進學則在致知

涵養ハ須用敬と云ふ
用也一學を進む
るに則ち知を致す
め在
第一等と將て別人
譲与して且其
二等と做んと說道
あや異れ才此如
く説は是自棄
仁は居り義は由る
こと能く不者も至
等しく同く不と雖も
其自小ゆへに也
學と言へば便に道と以
て志為人を言ふは便に
聖と以て志と爲

學問の肝要といふ身を正しく敬を以て此身を涵
一やうと云ふ又學問進んで上達するに必し理を
究り研て智を盡し
明じらるなりとぞ
○莫說道將第一等
讓與別人且做第一等才如此説便
是自棄
人の口病は善を更へて學問へ一等むつ
り所へ逆ひ及る他へゆづりて次の
二等むつひいへる學問へ人
有是を前の認り自棄學問なり
雖與不能居
仁由義者差等不同其自小一也
義は身を由居る吾はさういへるといふ
孟子一學を以て見ゆといふも小くつ
心へて
言學便以道爲志言人便以聖爲志
學問へ人倫の道を明めんと志向とせよ人の風
俗なりたるに聖人教の意味をうくるを以て

問必有事焉當敬否曰敬

與焉當敬之用

養之正事必有事

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

須有事焉

義在

義と申は道理の中候や否曰理の中

問敬義何別曰敬只是持

己之道義便知有是有非順理而行

是為義也

敬と義との別は曰敬は心を持

若只守一

箇敬不知集義却是都無事也且如

欲為孝不成只守著一箇孝字須是

知所以為孝之道

以と不知無益無益ちちり既め上は

此の語意同断ちり為子との父母孝行と

近思錄卷之二

四

近思錄卷之二

四

近思錄卷之二

四

近思錄卷之二

四

近思錄卷之二

四

近思錄卷之二

四

聖人爲之求
之志有然乎後
其志有然乎後
吾思之然乎後
得而適可思希
可立而之化也則
與權可

有無のいやい露の心わうむこころ
好報を獲てこころんりとの爲は作こ
か獲て先心かけたりふもの古人の仁
を爲て利欲心なり今人の報を獲たり利欲
氣を先念とすあやに
○有求爲聖人
之志然後可與共學學而善思然後
可與適道思而有所得則可與立立
而化之則可與權
聖人の御志向を求る
の執心なり
其共の學問を研究は不足なり又學び
掛て深く思念なり人との相与は此道は
適ぐ又思念深く聖人の意をたづね得る
か胸中見識実は立ちこころのなりて其
解るは嘗て學所と道理と化合する総て施
解るは皆その即宜なりと權の字は元來器

古之學者已爲
其終物と成
於至る今之學者
其終
己を喪ふ至る

君子之學必日新
新る日新
者日進也日
新る者必日
退く未だ進
退く未だ進
退く未だ進

物のまうりのこころ權はわうしのかこころ此權と自
由なるなりて輕きものなりと重きものなりと起好所
をとり用たり
○古之學者爲已其終
至於成物今之學者爲物其終至於
喪已
ひりの學風は己身の徳を明りあするが爲
兼つる既に吾身を明りあするが爲又他のもの迄や
そのなりたるを終へしむる只今の學問は名と知れ
んを好み又人の師となり自滿なり終へ人を
とりたつるは己徳迄合てうさうさ
○君子之學必日新日新者日進也
不日新者必日退未有不進而不退
者
君子の學問の仕方は日進行はるが爲己徳や
毎日々々新しくつるさめらる小人の學問は

唯聖人之道進退
無所無其造所
者極也

唯聖人之道無所進
退以其所造者極也

只聖人より進退
の至

明道先生曰性靜

靜者可以為學

明道先生曰性

可

○弘而不毅則無規矩

毅而不弘則隘陋

規矩無毅而弘不
則隘陋

○弘而不毅則無規矩

毅而不弘則隘陋

性之善を知り忠信
を以て本と為す此先
其大なる者を立

其大者

○知性善以忠信為本此先立

伊川先生曰人安重
らる則學堅固

○伊川先生

曰人安重則學堅固

博之と學を審み

○博學之審問

博學之審問

之と思ひ明之と

之慎思之明辨之篤行之五者廢其

行五の者其一

一非學也

學問の次第と成終

也

○張思叔請問其論或太高伊

張思叔請問其
論或い太高

川不答

○張思叔請問其論或太高伊

良久曰累高必自下

明道先生の曰人之爲學意先立

若循々々々已不

尹彦明伊川の見後

○明道先生曰人之爲學意先立
標準 學問の思ひの未熟なる時 標準と云ふ
向を立たること 聖人の場所をうゑんと標準とする

循不已自有所至矣

然と道学の原ふところ 至るべし

見伊川後半方得大學西銘者

程子の入て半年の後大學徳入の 學問の次第を心に見届又先生の西の銘の文を看

人有無心と説伊川

謝顯道伊川見

如何 對曰天下何とも思何

伊川の曰是則是此

○有

人説無心伊川曰無心便不是只當

云無私心 人の心へ私心 先生評して曰無心と

説ては不是 學問へ思慮工夫心をを用ゆる

○謝顯道見伊川伊

川曰近日事如何 先生いつの時謝氏いつ

對曰天下何思何慮 謝氏曰

伊川曰是則

是有此理賢却發得太早在 先生いつ

伊川直ふ是人を鍛
煉し得るを金目と
説く了て又道恰
好の工夫を著也

謝顯道の云昔伯
厚教誨せしむ只
管仲の言語の著

伯淳の曰賢与説話
そこの却て酔漢と
扶さふ似たり一邊
と救得れり一邊

思慮を不用して万変その理より多くえより此
 理有く然れども夫れ聖人の変く其えとの理
 と發明得徳有といふ太早過て宜う
 不々々々賢いといふよりさういふし

伊川直

是會鍛煉得人說了又道恰好著工

夫也
謝氏の語く恰好先生人々を鍛煉して恰も

たふつふふその恰好しく似合たるや
うふふ夫を著しむとと妙なりとて

○謝顯道

云昔伯淳教誨只管著他言語

先生せんせいの字ななり此意このいへひく先生せんせいう吾われをわくくうな
吾われ只ただ管かんわ先生せんせい教訓きょうくんの言語ごんご又執着しつしやくして工夫くふうを用

ては
ぬる
伯淳曰與賢說話却似扶醉

漢救得一邊倒了一邊只怕人執著

一
邊

先生曰賢と常の説話すもとくも人の酒め酔よなる漢を扶持してあゆびぐどう一い邊と

救得る時ハ一邊一倒了と同様うそにう
人一邊は執着しやくちやくをする、あらうとてうりてぞ

○横渠

先生曰精義入神事豫吾內求利吾

外也
咸通して事^{こと}を^を稽^きく^く研^{けん}時^{とき}へ^へ自然^{しぜん}と^と神^{かん}明^{めい}の

手前てまへの心こころの内うちは定さだり置おてわどろてころ時の外とけいへも
つてと逆さか戻もどりてころ利き順じゆんなりゆぜ

利用安身素利吾外致養吾內也

利順め事ことをもち用もちうもちふふひひ吾身ごみ安堵あんなりなり全ぜんく
素もとよりより吾心ごこころ内うちととなりなりふふ徳とくと積つてて致いたすすなり
窮きう知ち

化乃養盛自至非思勉之能強故崇

德神、明、御、徳而外君子未或致知也天、地、陰、陽、の

德を崇めり而外は
君子未だ知を致し
或未

形なり而後氣質
之性有

善之反則天地之
性存焉故氣質
之性君子性也
弗者有焉

德氣不勝不性命
氣也於子德氣

化を究知しつゝ聖人の御徳めて常々神明の
盛なる御徳のうへなるを御徳を養ひ保ち
る自然と至極を究る是全き聖人の夏して思
慮工夫を勉強する人の及てふやうな夫ゆへに
子聖人の學でてのち深く知を致さる
るの次第階級といふていあらうけし
○形

而後氣質之性

人の胎内やうなるの初天
地の正氣を得て人間と

善及之則天地之性存焉故
氣質之性君子有弗性者焉
自改て

氣質之性君子有弗性者焉

自改て

德不勝氣性命於氣德勝其氣性命

於德

右の道理なり故に天より受得る善徳
氣質が不勝る時ハ性命が氣の役

窮理盡性則性天徳

のちうく徳勝時ハ氣
窮て徳の役ものとなる

命天理

天性の道理をうち
受得たる自然の徳を命天

氣之不可變者獨死生脩夭

而已

學問の力を以て氣質変化の修行するもの
生死の修夭のものとなるたへ人間に見

莫非天也陽明勝則德性用陰濁勝

則物欲行

凡て人の明暗なり暗く濁るもの
天より賦附するものなり

陽明勝則德性用陰濁勝則物欲
行

惡を領て好と全
る者其必ず學に
由乎
其心と大も則能
天下之物と體を物
未と體未有則心
外有と為

世人之心見聞之狭
於止聖人の性と
と見聞を以て其心
と結不其天下と視
る一物とて我
非といふと無

孟子心を尽則性
を知ると謂ふ天
と知と此を以て
天大無外故
外有之心を以て天
心合とる足不

仲尼と絶始學子自
成徳に至る而端
と竭す之教也

意思有也必ず待
そ有也固不化也
也我方有也

領惡而全好者其必由學乎
惡と欲心の欲心を領て好と
ろえと全完するといふ學問の
大其心則能體天下之物物有未
體則心爲有外
物と吾身體の内と
けいれん故おれとて心せしむる時
我れ人の身内と外との心せしむる時

世人之心止於見聞之狭聖
人盡性不以見聞結其心其視天下
無一物非我
世の人は見聞所を迷
ふ見聞心を結結とて心せしむる時
天下の間

孟子謂盡
則知性知天以此天大無外故有外
之心不足以合天心
心の誠とて天と
又性を知らり性本心の理とて天と人同鳥獸
外と物と持領て聖人の徳とて天と身内
外との心とて若や外と他人との心
○仲尼

絶四自始學至成徳竭兩端之教也
聖人門人を教ふの初始より學徳成就まで
説くといふ意は我國の四と絶切に禁むる

意有思也必有待也固不化也我有
方也
意は一念の發するなり是人の定まりあり
有るなり必ずしも右何ぞ

四の者一有ハ則
天地と相似不
レハ矣

上達ハ天理ヲ反リ
下達ハ人欲ヲ徇
者歟

知崇ハ天也形
して上也昼夜通
テ知ハ其知崇矣

者有一焉則與天地爲不相似矣
以右

上の心ハいつとも有時ハ天の御心
○上達反天

理下達徇人欲者歟
君子ハ勿論ノモノ惣
テ常人ノモノモヤ一二

知崇天也形而上也通晝夜而知其

知崇矣
形して上ハ形として開カズ
智の汝汰く晝といハ陽カテ明カ

知及之而礼を以
テ不性の已ハ有
レ非也

故知礼性を成
テ道義出天地位
而易行もぐじ

困の人を進ハ徳の
弁らるる爲感の
速カるる爲ちり

孟子人徳慧術

知及之而不以禮性之非已有也
問

義出如天地位而易行
礼を以テ性成就
ハ是として人間

困之進人也爲
人困究の身分ハ出合として人同
の道徳ハ進の吉縁カテ徳ハ人

徳辨爲感速
の心得ハ人困の時心得ハ明辨カテ
速ハ人情ハ感通するとの義カテ

孟子

智有者常以疾
疾有存者謂此
を以てり

言教有動其法
有昼為有宵
得息有息養
有瞬存

横渠先生訂頑
作て曰

謂人有德慧術智者常存乎疾以
此疾疾はるる病人の困窮又不意災難
又何角に付て災難を免れん此章の
行身をくしむる有意無情をくしむる人情通じ
て人の上におきては仁政の
民百姓が及ぶるなり

言有教動有法
有德の君

晝有為宵有得息有養瞬有存
子一言の詞の人の教をくしむる立居又い歩行といふ付
てを礼法を守りて動くてくしむる昼の動い善又
とを瞬い宵い道德を考へくしむる身を得くしむる有息
瞬目する間や徳を養育い存の工夫
り

横渠先生作訂頑曰

先生二つ
の文を作

門人お示り二つ訂頑
意を立てるがまかりと訂いたすといふ

乾稱父坤稱母予茲藐焉乃混
と母と稱以予茲
貌焉乃混然
て中處

乾稱父坤稱母予茲藐焉乃混
然中處
乾と坤と天地の中間の為人の父と母とを稱する中
混然とて居る處

故天地之塞吾其
其性民吾同胞物吾
其性民吾同胞物吾

與也大君者吾父母宗子其大臣宗
子之家相也尊高卑所以長其長慈

孤弱所以幼其幼聖其合德賢其秀

也凡天下疲癯殘疾惇獨鰥寡皆吾

兄弟之顛連而無告者也于時保之

凡天下之疲癯殘

經典餘師

疾惇獨鰥寡皆
吾兄弟之顛連而
告之憂無者也時
干之を保つ子の
翼也

樂且憂不孝
年純孝者也

子之翼也

天地の間に陰陽の氣塞ふと吾の

天地といふもの師とて大將のて人間を性付へ也
鳥獸虫魚草木の中の師とて然れ
民といふ胞とて兄弟とて之を元と有
情無情の木草鳥獸虫魚草木の与下く大君へ吾父母と
す天地の宗領子とて関白老中へ右宗領の家相と
高年とて之をひき長養長老の祀とて孤弱とて慈
愛とて之をたもつとて聖人といふ天地人三才
合とて大徳なり賢人といふ人とは出と
くして天下の内は疲瘵殘疾惇獨鰥寡夫婦の
類とて之を必竟とて兄弟の顛連とて之をの
つて吟味とて之を時とて保とて大君宗子の務
めとて翼とて
樂且憂純孝者也
の道は心入の純孝のいたし身が貧乏とて我いり貧乏
もつて必ず欲深くとて心も出とて

違を悖徳と曰仁
と害とを賊と曰

惡を濟者不才

其形を踐へ惟肖
者也

化と知と則
善其事と述神
を窮とて其志と繼

違曰悖徳害仁曰賊

人間の第一の心得肝
要は父母とやいふこと

て冥加と有とて思ふ樂むとて常不足とて
仁とて親とて見せとて孝行とて之をの
行とて格別とて六つとて之を及べとて父
母の御心と違ふとて言葉とて之を子とての
道と違ふとて人間の心徳と悖とて仁の道とす
れて我理と害とてと
と盜賊といふと
濟惡者不才
吾の吾に
ふと心得

者也

人なれば人の形のて鳥獸虫魚とて聖
人の教と相肖
知化則善述其事窮神則

善繼其志

天地の万物と化と月月の理と知
人との君とて上と立者と承継と

屋漏も愧不
と爲

心と存し性
を養

旨酒を悪し
伯子之養を顧

英材と育
穎封人之類と錫

國家を治むるの法と守りてが事と本はさへ先
祖神明の法と守りてが事と本はさへ先
祖神明の法と守りてが事と本はさへ先
祖神明の法と守りてが事と本はさへ先

存心養性爲匪懈

惡旨酒崇伯子之顧養

崇伯の子と聖
人禹王の

育英材類

封人之錫類

衛の莊公の母御二男の叔段と

勞を弛不而豫
舜の其功也

逃す所無而
と待申生の恭也

不弛勞而底豫

舜其功也

ひう一虞氏の舜唐土を孝行

無所逃而待烹申生其恭也

也

晋の太子申生と申へ継母の讒言あり

也

人の病は言ふに好色たるをせしむ
出でて敵手の人を一行義正しく角やさる詞の
恥づき急はさう直して今の戯言をいふと見たり
とつもの有又たなむれらる動作をうて咎められて後
の云わいふ同断よりさうく必竟の所実をいふは
るゝ有て兼てさうの謀思をいふは実をいふは
重なる先生の

發於聲見乎四支謂非

已心不明也

右の「已」は「心」を見し「四支」は「心」を
み發してその後「已」は「心」をみし

欲人無已

疑不能也

既「已」は「心」を見し「四支」は「心」を
み發してその後「已」は「心」をみし

過言非心也過動非誠也

不圖言の過失
有るに此

心より出た「已」は「心」を見し「四支」は「心」を
み發してその後「已」は「心」をみし

聲失其四體

失於聲繆迷其四體謂已當然自

然謂自証也

証也

右「聲」は「失」する「四體」は「繆」迷せし「過失」なるゆ
に「証」は「自」証する「証」は「証」する

他人の已に従ふ

証也

他人の「已」に従ふ「証」は「証」する

已從証人也

他人の「已」に従ふ「証」は「証」する

或者謂出於心者

或者謂出於心者歸咎為吾戲

失於思者自証為吾誠

失於思者自証為吾誠

不知戒其出汝者

不知戒其出汝者歸咎其

不出汝者

不出汝者

傲且長且非遂不
智孰焉其甚

長傲且遂非不智
孰其焉傲且長且非遂不智孰焉其甚

將已之備と云れ
必先厚重なりて自
持せし厚重なりて學
を知らず徳を進而
固不矣

以自持厚重知學徳乃進而不固矣

忠信ハ徳又進む
友と尚而賢と云
みせし已勝者此
親人々を欲せむ

徳惟尚友而急賢欲勝已者親忠信進

過を改めざる者
其如無

無如改過誠心一配ハ友と尚加ハ賢と云る人を急欲するを肝要と免る已ハ勝れたる人と親実

横渠先生范巽之
謂て曰く吾輩古
人及び不病源何
より在

之不吝人々やまらぬ早速なり

巽之請問

横渠先生謂范巽之曰吾輩不及古人病源何在巽之

巽之請問

巽之請問何と云ふ在所を問ふや

先生の曰是悟難
非此語を設者蓋
學者意を存する
忘不るを欲庶ハ
心と遊し浸熟せ
一日脱然として大寐の
醒るを得如く有

先生曰是非難悟設此語者蓋

欲學者存意之不忘庶游心浸熟有

一日脱然如大寐之得醒耳先生申されけり此言

醒るを得如く有

醒るを得如く有時ハ偶々憂の醒るがごとく合点

未^い心^{こころ}を立^たてしむるを
知^ちる^る思^しふ^ふ之^の疑^ぎ
を致^{いた}す^ると思^{おも}ふ

既^{すで}立^た所^{ところ}を知^して講^{こう}治^ち
之^の精^{せい}を不^ふくと思^{おも}ふ

講^{こう}治^ち之^の思^し術^{じゆつ}内^{うち}非^ひ
といふ^ふ莫^な勤^{きん}と雖^{いへ}
而^{しか}何^{なん}厭^{えん}

欲^{よく}可^かと急^{いそ}む^る所^{ところ}
以^{もつ}者^{もの}吾^{われ}心^{こころ}を不^ふ疑^ぎ之^の
地^ちを立^たん^だと求^{もと}然^{しか}
後^{のち}決^{けつ}た^る江^{かう}河^がの若^{ごと}
利^りを以^{もつ}吾^{われ}往^{かう}と

○未^い心^{こころ}を立^たてしむるを
知^ちる^る思^しふ^ふ之^の疑^ぎ
を致^{いた}す^ると思^{おも}ふ

知^ち立^た心^{こころ}惡^{あく}思^し多^{おほ}之^の致^{いた}疑^ぎ
學^{がく}問^{もん}の志^し向^{かう}を
立^たず^る内^{うち}色^{しき}々^々

既^{すで}知^し所^{ところ}立^た惡^{あく}講^{こう}治^ち之^の不^ふ
精^{せい}治^ちす^るこ^のの^くら^うの^うめ^やす^いら^うと思^{おも}ふ

講^{こう}治^ち之^の思^し術^{じゆつ}内^{うち}雖^{いへ}勤^{きん}而^{しか}何^{なん}厭^{えん}
味^{あじ}吟^{ぎん}

所以^{ゆゑ}急^{いそ}於^お
之^の思^し慮^{りょ}工^{こう}夫^ふへ^てれ^るに^き學^{がく}術^{じゆつ}の^{うち}に^あれ

可^か欲^{よく}者^{もの}求^{もと}立^た吾^{われ}心^{こころ}於^お不^ふ疑^ぎ之^の地^ち然^{しか}後^{のち}
吾^{われ}こ^のう^けに^あり^て欲^{よく}所^{ところ}を^急む^る

若^{ごと}決^{けつ}江^{かう}河^が以^{もつ}利^り吾^{われ}往^{かう}
と^二夫^そを^一決^{けつ}す^るに^あら^ば

遜^ひ此^こ志^し務^む時^{とき}
置^おて^は江^{かう}河^がの^水決^{けつ}流^{りゅう}と^も如^{ごと}く^に往^{かう}は^り利^り有^ある

敏^{みん}厥^{くわく}修^{しゆ}乃^な來^{きた}
志^し向^{かう}を^高く^に持^もつ^る身^みを^卑謙^{けん}遜^ひ

故^{ゆゑ}雖^{いへ}仲^{ちゆう}尼^に之^の才^{さい}
修^{しゆ}理^りと^手入^に來^{きた}と^もか^らり

之^の美^み然^{しか}且^{かつ}敏^{みん}以^{もつ}求^{もと}之^の今^け持^も不^ふ逮^た之^の資^し
然^{しか}る^る今^けの^人々^々に^不逮^た資^し性^{せい}と^もい^ふに^あら^ば學^{がく}問^{もん}乃^な

而^{しか}欲^{よく}徐^{じゆ}徐^{じゆ}以^{もつ}聽^き其^{その}自^{みづか}適^{たふ}非^ひ所^{ところ}聞^{きこ}也^{なり}
故^{ゆゑ}然^{しか}る^る今^けの^人々^々に^不逮^た資^し性^{せい}と^もい^ふに^あら^ば學^{がく}問^{もん}乃^な

仕^しが^ら徐^{じゆ}々^々と^吾自^{みづか}適^{たふ}な^るを^足ら^ずの^やい^ぢの^やら^ぬ
て^は君^{きみ}子^この^心を^用ひ^て用^ひら^れて^は聞^{きこ}た^るか^らい

○明^{めい}善^{ぜん}爲^{ため}本^{ほん}固^こ執^{しつ}之^の乃^な立^た擴^{くわく}充^{ちゆう}之^の則^{すく}
仕^しが^ら徐^{じゆ}々^々と^吾自^{みづか}適^{たふ}な^るを^足ら^ずの^やい^ぢの^やら^ぬ
て^は君^{きみ}子^この^心を^用ひ^て用^ひら^れて^は聞^{きこ}た^るか^らい

大^{だい}易^い視^し之^の則^{すく}小^{せう}在^あ人^{ひと}能^{のう}弘^{かう}之^の而^{しか}已^{なり}
善^{ぜん}を^明か^に見^み認^{にん}む^るを^一根^{こん}本^{ぽん}と^もい^ふに^あら^ば既^{すで}に^見認^{にん}む^る

一^い固^こと^執守^{しう}て^德を^立て^るを^是を^推擴^{くわく}充^{ちゆう}る^時に^あら^ば

善^{ぜん}を^明か^に見^み認^{にん}む^るを^一根^{こん}本^{ぽん}と^もい^ふに^あら^ば既^{すで}に^見認^{にん}む^る

今日只德性上工夫
向學之道將心
為日自求

○今日只將尊德性而道問學為心
日自求

向學者有者於
於問學者有所背否於德性有所懈

否

於問學者有所背否於德性有所懈

此義亦是博文
約禮下學上達

此義亦是博文約禮下

學上達

以此警策一年安得不長

此以警策一年安得不長

以此警策一年安得不長

日須求多少為益知所亡改得少不

日須求多少為益知所亡改得少不

善此德性上之益

善此德性上之益

讀書求義理編書須理會有所歸著

讀書求義理編書須理會有所歸著

勿徒寫過又多識前言往行此問學

勿徒寫過又多識前言往行此問學

上益也

上益也

勿使有俄頃閑度逐日

勿使有俄頃閑度逐日

似此三年庶幾有進

似此三年庶幾有進

天地の爲心と立
生民の爲道と立
去聖の爲絶學と
繼萬世の爲太平を開

載學者を先礼
を字使所以者礼
と字を爲
則便世俗一副當習
熟纏繞と除去

○爲天地立心爲

生民立道爲去聖繼絶學爲萬世開

太平これ教といふ天地神明の冥加を人々咸に念
奉りて心向を立べしとて聖人の万

民の爲に道を立りて人々去往の神明聖人の學問を
絶ゆる事ありとの跡を繼りて万世やぐり天下太平の

提を介し○載所以使學者先學禮者

只爲學禮則便除去了世俗一副當

習熟纏繞載張先生の名此章の心はこれ
門人學者の人々礼儀を第一とす

小引一ちすのふ説今の世の風俗はかく表面を
より実義をうらみし心身は纏繞一副有と除

去りて礼儀を知りて人のまじり物のはりなり
いつと人々恭敬する放する心得正直なり

之と延蔓之物
譬之纏繞と解
即上去

譬之延蔓之物解纏繞即上去藤蔓

苟能一副當の世
習を除去
便自然脱洒也

延蔓の解はけり苟能除去

又礼を學則以守
得定可

了一副當世習便自然脱洒也

須心を放し寛快
公平を以て之を求
德性自廣大

則可以守得定一定まり身の守り所を得べし

○須放心寛快公平
以求之乃可

見道況德性自廣大心と寛快公平あり
工夫の時道を見

易曰窮神
知化德之盛也
豈淺心可得

易曰窮神

知化德之盛也
豈淺心可得

知化德之盛也豈淺心可得の詞を

易曰神と窮化と知
德之盛也豈淺心
得可

易曰窮神

易曰神と窮化と知
德之盛也豈淺心
得可

知化德之盛也豈淺心可得

人多老成則以則
昔下問不故身
終身不知

又人道義の先覺
を以て之を處る
可復知不所有
不可故亦昔下問

昔問不從遂は百端
を生て人我を欺
妄す寧身を終
身不知

性德ゆゑ心盛んもの神明の化育うふを
得べし ○人多以老成則不肯下問故

終身不知 人の病を老成たる身分るれを
下問の病を老成たる身分るれを

又為人以道義先覺

處之不可復謂有所不知故亦不肯

下問 其の病を老成たる身分るれを

從不肯問遂生百

端欺妄人我寧終身不知 人我同たつて

多聞不足

多聞以て天下之
故を盡す足不

苟多聞を以て天
下之變を待則道
以其嘗知所酬

學を為の大益は自
氣質を變化する
夏を求む在

爾不皆人の為るの
弊に於て卒に光明
を見るを得不

以盡天下之故 多聞以て天下之

苟以多聞而待

天下之變則道足以酬其所嘗知若

却之不測則遂窮矣 夏を求む在

益在自求變化氣質 學問の仕方に

益在自求變化氣質 學問の仕方に

不爾皆為人

弊卒無所發明不得見聖人之與

弊卒無所發明不得見聖人之與

文の密察を要せん
を要し心は洪
放せんことを要

疑を知らず者ハ只
是便實作不バ
なり既實作と
し須く疑有ベシ

必行不処有是疑也

心大らハ則百物皆
通心小らハ則百物
皆病

氣質を吾修むる時ハ口々々々人の爲す
の學問とて吾發明とつてとる終ハ聖人の
奥意なりんことを
○大要密察心要洪

放 聖賢の示し教う文章ハ密細ハ吟味ハ察
すべし心向ハ洪放有ベシ是はどとて可なり

○不知疑者只是不便實

作既實作則須有疑 鬼く學問ハ疑考
を生ずるなりんべし

疑ハ無心を用ゆるのち又ハ浮氣と見過
すゆへとれとて實業實作する學問ハ工夫と

必有不行處是疑也 或ハ書
を考へ

○心大則百

物皆通心小則百物皆病 心の用ハ
大らハ百

人功學に及不
有雖心亦宜忘

則人事に接し雖
即是實行道ハ
非といふ莫也

心若之忘則終身
す之小由ハ是
俗事

内外を合セ物我
を平ラ此道之
大端と見

既學而先功業

○人雖有

功不及於學心亦不宜忘心苟不忘

則雖接人事即是實行莫非道也 志

つて何とて不得已功小學問の妨止なり

心若忘之則終身由之只是俗事

終身由之只是俗事

○合内外平物我此見道之大端 問

○既學而先有以

と以意と為者
有字に於て便
相害

既有意有必穿
鑿創意して事
の端を作起す也

徳未成ひて先
功業を以て事
為は是大匠の代

て劉希平手を傷
不て希也

竊嘗て病て孔
孟既没して諸
儒置然として約

功業為意者於學便相害

意必穿鑿創意作起事端也

徳未成而先以功業為事是

代大匠劉希平傷手也

竊嘗病孔子既没諸儒

置然不知反約窮源勇於為作

先生

とを知不苟作
小勇

不逮之資を持
而後世の知を急

明者一にび覽
肺肝を見らる如

然り其に其量
知不てを見也

方且其弊を創
吾誠を默養

所の日力不足而未
他の為を果さん

竊小學風の病を病む孔子孟子の没して世間の儒風も博識トナして道徳は本源を約究ひてをわめれ苟且を持

不逮之資而急知後世

明者一

覽智見肺肝然多見其不知量也

方且創艾其弊默養吾誠

顧所患日力不足而未果他為也

心を付けて顧見るべき第一心を他へ用ひて弊を創艾して心を静し黙て誠実忠信の

學未至而好
以變語者
必終有患
知

志皆を養て又工夫するも必ずしも其のたゞ
に一つ二つ三つ所患するも他へつるをたゞ
してその志皆を仕るるさばり
○學未至而
好語要者必知終有患
未至學問の
時臨義をへん

蓋愛輕議
不可不驟然
變語則
術を操て已
正
不を知る

對ハ利口弁舌を好むものいひて
身の患を引いづるをたゞり
蓋變不可輕
議若驟然語變則知操術已不正
計畧のてし又當時御上のてし又人の善惡いり
いづるも驟然いづるも法なり心の操術の正し

凡事蔽蓋
不見底只是
益求
不
人皆其道義の得
所至所を言不見

益
○凡事蔽蓋不見底只是不求
何事をも蔽蓋し見せざるは品をたゞ
學問をたゞし其身の益を不求のちりてかり

得せしめ
不底有又吾言
於説无所無
非

見底又非於吾言無所不説
又人はい
義のいづる心はかり得て行状もその場の至然れども
その人他人は知るるを欲せず又人を見得るこ
とを得ざるは高き行状然らば
○耳目役於外
顔子の位及と云ふなり

耳目外於役
外事を攬者其
實是自墮

攬外事者其實是自墮
人の耳目又人乃
目も各聞あり
役使てその外の変まで身引攬りてつるもの
ハ実情といふなり墮れやぶるやういふをたゞり

不自治
短長不能
反躬者也
不者也

不自自治只言短長不能反躬者也
吾身を治りば身を反り見ざるものハ只偏病して人
の短り長りを口くせゆものいふるをたゞり

學者大宜
志小氣輕
不

○學者大不宜志小氣輕
學者の病ハ
志小氣輕
志小則易足易足則無

志小則不足易
足易則由進
無

氣輕則未知
を以て已の知
を未學を已
の學よりと為

由進

志心の狭そののめ
やはどて宜き
端足してそれ

氣輕則以未知為已知未學為

已學

氣質の輕薄
顔よりて
格致を
格致を
格致を

そのの學問より得難

近思錄卷之二下終

